



よしだ
吉田 松陰

〔第八話〕

吉田松陰は本名を矩方のりかた、通称を寅二郎とらじろうといい、長州ちやうしゅう（山口県）萩はぎの松本村に生まれました。十一歳のとき、殿さまの前で講義をしたほどの秀才でした。のち松しょう下村塾かそんじゅくで、幕末から明治にかけて活躍する多くの人材を育てました。

塾はもともと叔父おじの玉木文之進たまきぶんのしんが開いたもので、松陰が主としてここで教えたのは一年一か月くらい、それ以前の、自宅謹慎きんしんちゆう中の講義をふくめても、あわせて僅か二年程度の短い期間にすぎなかったのです。

松陰の教えを受けた者で、はつきり門下と呼べる者約八十名。そのなかから、木戸孝允きどたかよし（桂小五郎かつらご）・高杉晋作たかすぎしんさく・久坂玄瑞くさかげんずい・伊藤博文いとうひろぶみ・山県有朋やまがたありとも・品川弥二郎しながわやじろう・山田顕義等々やまだあきよし、日本を背負せおった著名な人物が輩出はいしゅつしました。

弟子でしの目から見た松陰先生像をひとつだけ紹介しましょう。品川弥二郎（のち

内務大臣。松陰の思想をよく受け継いだ人として知られる）の言葉。

「誰しも先生の事跡じせきより考うれば、いかにも厳格げんかくにて激烈げきれつなる人のように思われるけれども、実は決して然らず、温順おんじゆんにして怒るということのなき、骨格こつかくの小兵こひやうな人であつた。塾生は一度も先生から叱しかられたことはない。しかしながら、一人として先生をおそれざるものなく、みな先生を見てビクビクしていたものである」

あたた

温かくおだやかで、一度も叱しかつたことのない先生なのに、生徒はその威厳いげんにおいていたようですが、十七歳の弟子の目で、みごとに描き出されています。こんな先生が今の学校にいたら、学級崩壊ほうかいなど起きることは絶対にありません。

こころざし

松陰は高い志を抱く学者でありながらも、あくまで謙虚けんきよで庶民しよみん的てきでした。常にうちとけた態度で人びとに接し、深い心のつながりを保ち続けました。だからこそ、そのまわりには、情じやうにゆたかな、人間としてすぐれた多くの師友しゆう・近親きんしんがあり、さらには後輩こうはい・門弟もんていにも恵めぐまれたといえましょう。

松陰は安政あんせいの大獄たいごくで捕とらえられ、三十歳の若さで処刑しよけいされます。辞世じせいの歌は、

「身はたとえ 武蔵の野辺に 朽ちぬとも 留めおかまし 大和魂」
むさし のべ く とど やまとだまし い

たとえ自分の肉体は朽ちはてても、大和魂——国を思う自分の精神だけはここに残して、魂は永久に生き続けたい、との意味です。

またそれより数日前、両親や親戚に当てた別れの手紙に添えた歌。

「親思う ころにまさる 親ごころ 今日おとの音おとずれ 何ときくらん」

音ずれは、知らせのことです。これらの歌を口ずさみますと、新しい日本の建設を夢見て、その志なかばにたおれた松陰の、熱い憂国の精神とともに、かれがいかにか父母・肉親への情愛の深い人であつたかが察せられ、胸にせまるものをおぼえます。

松陰の「士規七則」という文章があり、九歳年下のいとこが元服（成人式）のさい、書いて与えたものです。七項目あるなかのひとつに、

「徳を成し材を達するには師恩友益多きに居る」とあります。人間性を高め、才能を磨きあげるには、良い師から受ける御恩や、良い友から得る影響が多であ

る。だからわれわれは、人との縁えんや交まじわりをたいせつにしなければならぬ——
というのであります。私の属する「師友会しゆうかい」は、故安岡正篤やすおかまさひろ先生が、この松陰の
文章から採とって命名されたものです。

安政六年（一八五九）三十歳没

○ 私が「志」の大切さを教えられたのは吉田松陰です。

高い志をもつことによって、多くの難関を打破できました。

○ あの若さで国家を背負う多くの弟子を育てた力は正に驚異的。

国を思う精神は我々も受けつがねばと思いました。

（M生）